

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### この1年の歩み（昭和54年から55年にかけて）

村上英治

1) 昭和54年10月27, 28両日, 名古屋大学において, 「昭和54年度心理臨床家の集い」を開催することができた。北海道から沖縄に到る国内全域から, 現時点における心理臨床家のもつさまざまな課題をひき上げて, 300名近い志同じくする人々が集まり, 症例検討を中心に, 臨床家としてのウデを, 全国的規模で磨く機会を得たと同時に, 直面する今日の問題点を, シンポジウム形式で討議しあうことによって, 共通する苦悩を交流することができたのは, わが国の臨床心理学の発展の歴史の上で, まことに画期的な催しであったといえる。ちょうど10年前, 大学紛争ふきすさぶ嵐のただ中で, 第5回日本臨床心理学会大会を名古屋でひきうけながら, それが, 学会のあるべき姿を根源的に問い直すという形で, 学会紛争の契機ともなった経験を思いかえし, 10年一昔, この間, 心理臨床家によせられてきた期待と責務, それにこたえられるものか否かを, 改めて重く感じさせられることである。

2) この「集い」でも, 参加者からの要請の高かったものは, 具体的な症例そのものの徹底的な検討である。臨床家にとってまさしくケースは, 研修の中核ともなるべきものであって, この「集い」をうけて今年11月予定されている八王寺での「'80年CPの集い」においても, このケース検討を中心に企画がすすめられていると聞く。55年8月, 誠信書房刊の「臨床心理ケース研究 3」においても, 私自身, 和知富士子氏の「自閉的傾向をもつ一精神発達遅滞児の集団遊戯治療のプロセス」と題するケースレポートに, 私なりの臨床棟での体験実践をふまえたコメントを提起した。この種の, レポーター, コメントーターの腹藏ない交流が深まることが, 今後いよいよ要望されることになる。

3) こうした障害児を対象とする集団療育を, 私自身ここ10年の取り組みとしてつづけてきた。昨年からの養護学校義務制に伴ない, 対象児は, より重度・重複の傾向を示している。昨昭和54年度, 後藤, 譲両君をはじめとする8人の仲間を取り組んできたこれらの実践は, 子ども自身の成長, それとかわっての療育者の成長, さらにまたグループ参加をとおしての母親自身の成長とい

った面からの分析としてすすめられ, 55年5月, 東海心理学会第29回大会で口頭発表を行った上, 2つの実践記録として, 今年度のこの紀要にも, その経過と成果をめぐる報告としてまとめられた。

4) 義務教育実施に伴う就学指導委員会のありかたに関しては, 実践の上でかなりの問題が予想される。54年4月から愛知県教育センターでのプロジェクトに参加しての追跡調査の顧問として, その企画・立案・さらに研究報告のまとめに私なりの援助をすすめてきた。55年3月, 教育委員会からの報告書「心身障害児の就学指導に関する研究(第1次報告)」として刊行されたのは, 昨年度のまとめであり, ひきつゞき昭和55年も, 第2年次のインテンシブなプロジェクトとして, 個別事例の追跡が予定されている。明年度「国際障害者年」を迎える時にもあたるだけに, 障害者たちにとってほんとうの意味での参加と平等がかけ得られることを, このとき心から期待するものである。

5) 国際的な活動はこの意味においてより促進されねばならない。昨54年11月5日から9日まで, 5日間にわたって, マレーシア, クアラルンプールで, 第4回アジア精神薄弱会議が開かれた。第2回の東京大会以来, ひきつづいて参加しているひとりとして, 先進国としての日本が, アジア地区におけるこの種の課題の認識を深め研究を促進していくためのリーダーとなるべきことを確信させられたと同時に, 欧米との交流のみならず, 地域的にも近接しているこのアジア地区での協調と連帯が, いよいよ強調されねばならないことを肌で知ることが出来た。さらにシンガポール, ジャカルタにもまわって, それぞれの地域で, 関係者たちとの討議を深めることができたことは, 私にとってきわめて有益であった。これらの状況については, 依頼に応じて「精神薄弱児研究」259号(55年3月刊)に「アジアはひとつ——その協調と連帯を——」と題してのレポートを寄稿した。

6) ロールシャッハ研究の一貫として, 昭和54年度科学研究費の援助を得ることが出来た。いわゆる名大式技法の特質として知られている「思考・言語カテゴリー」の再検討を試みようとするものであり, 私どもが関係す

る病院サイコロジストの方々の積極的な協力を得ながら、土川・池田両君との共同研究として、具体的な症例の分析から検討をすすめている。現段階での暫定的な成果は、中間報告として、これも55年5月の東海心理学会第29回大会で、「名大式技法における〈思考一言語カテゴリー〉の再検討（第1報）」として、6名の共同研究者が報告を行った。幸にして今年55年度もひきつづき、科学研究費の援助が得られているので、これらの資料をもとに、具体的にカテゴリー再構成の仕事をさらに強力におすすめていきたいと考える。

7) 私にとって、今ひとつの臨床活動の柱は学生相談室における実践である。昨年の京都における会議をうけつづき、第13回全国学生相談研究会議を、この55年1月7日から8日まで定光寺の愛知県労働者研修センターにおいて、名古屋大学が当番校として開催をひきうけることになった。共通一次元年ともよばれる昨年度の新入生が、大学という状況の中で、どのような問題を新らしく課せられることになるのか、それをメイン・テーマとして、今度も、学生相談活動の中での症例検討を中心に、熱心

な討議が合宿形体でもたれ、多くの成果を得たように思われる。

8) この活動の中で最近特に大切にしたいと思っているのは、学生を対象としての、また教官同志による、エンカウンターグループの実践である。54年度も10月13日から17日まで鳥羽菅島において、名古屋大学学生を対象とするグループを、厚生補導特別企画の援助にもとづいて実施して、その意義をいよいよ実感することができたし、また教官エンカウンターは、54年度の河口湖グループにひきつづき、今年もまた7月20日から22日まで箱根での集まりで、改めて仲間同志との出会いをもつことができた。これらの成果は今秋刊行される予定の、佐治、福井両氏と私との共編になる、誠信書房刊「グループアプローチ 2」に、前者は「名大グループ3年間の成果」として、田畑、土川、伊藤、渡辺四君との共同執筆で、また後者は「教官エンカウンター・グループ座談会」の中でふれられている。今後ともこうした体験をとおして、常に新たな自己との対決を深めていきたいと考える。

(昭和55年8月14日)

## 研究経過報告——'79年秋～'80年夏——

小 嶋 秀 夫

〔児童発達研究における歴史的視点〕この領域での自分の考えは少しずつ進歩していると信じてはいるが、外に大した成果が現われた訳ではない。ただ、ここ3年ほどの仕事の結果を2つにまとめ、今後の1ステップとした。1つは、日本心理学会第44回大会での小講演「児童発達研究における1つの歴史的視点」(札幌, 8月)で、もう1つは本学部の特定研究の成果をまとめた2冊本の1つに載る「児童観研究序説——児童観研究の意義と方法——」である。

未知の領域に素人として乗り出すと、初期のうちは割とrewardを多く受ける。何しろ、自分の頭の中に取り入れるべき情報はいくらでもあるから。また、学問的意義はいざ知らず、個人的には大いなる「発見の喜び」を経験することもできる。昨年の暮に京大の医学図書館の富士川文庫で、3年間自分で探し、何人もの人に聞き、日中の医学史の本を調べ、人を介して外国で探してもらっても見付らなかつた元代の本の該当箇所を遂に「発見」した。これには、探し方についての景嘉氏(東京)の示唆が大きな助けとなった。

〔社会化研究〕昨年11月にサンフランシスコで開かれた日米比較社会化研究のPlanning Meeting(日本側代表: 三宅和夫氏・北大)に参加し、広義の社会化研究に関す

る2つのpresentationを行なった。1つは波多野詠余夫氏と共同の認知的課題の解決様式に関するものであり、もう1つは日本の子どもの行動基準の獲得過程(いわゆる、ホンネ・タテマエの問題)に関するものである。

これとは別に、BerkeleyのBlock夫妻と、小規模な比較社会化研究を計画していて、往來があった。

〔児童研究の倫理〕筆者の問題提起(児童心理学の進歩, 1975・1979年)に漸く少しの反響が出てきたと思われる。日本教育心理学会第22回総会準備委員会(東大)の依頼により、これに関するシンポジウムを企画し、現在、準備的討論を3名の方と進めている。

〔発達研究について〕この基礎となるべき発達の概念化、次元化とその測定尺度の構成についての若干の考えは、日本教育心理学会第21回総会の発達部門の発表のレビュー(教育心理学年報, 1980)と、日本心理学会第44回大会のパネル・ディスカッション「発達心理学の研究はいかにあるべきか」で述べられた。後者は、Wohlwill, J. F. (1973)の影響を強く受けている。学会発表の在り方についての筆者の提言(教育心理学年報, 1980)は幸いにも一部受け容れられ、上述の教育心理学会総会(東京, 10月)で試行されることになった。

〔認知様式〕研究論文は出せなかつた。いま、場依存性